



Title	総合学科高校の科目選択と進路選択に関する調査研究
Author(s)	望月, 美和子; 横井, 敏郎; 市原, 純
Citation	公教育システム研究, 6, 55-78
Issue Date	2007-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/20518
Type	bulletin (article)
File Information	03-.PDF



[Instructions for use](#)

総合学科高校の科目選択と進路選択に関する調査研究

望月 美和子¹⁾・横井 敏郎²⁾・市原 純³⁾

目 次

はじめに

第1章 総合学科に関するこれまでの議論と分析の視点

- 1 新学科総合学科の創設理念
- 2 総合学科に関するこれまでの議論
- 3 本論文における分析の視点

第2章 調査高校の転科経緯とガイダンス科目

- 1 北海道森高等学校
- 2 北海道標茶高等学校
- 3 北海道石狩翔陽高等学校

第3章 総合学科の評価と課題

- 1 調査の概要
- 2 総合学科に対する全体的な評価
- 3 科目選択における系列への依存度
- 4 科目選択の視点の検証
- 5 得られた知見

終 章 総合学科における科目選択と課題

- 1 生徒の科目選択と系列
- 2 総合学科の課題

<参考文献>

<使用した資料>

キーワード：高等学校、総合学科、系列、科目選択、進路選択

はじめに

1980年代後半から、わが国では高校教育改革が推進されている。その政策の基本線は高校教育多様化にある。高校教育多様化政策を進めた動因として、次のいくつかが考えられよう。1つは高校入試、大学入試における受験競争の深刻化であった。とくに高校の偏差値序列化は子どもたちの成長に有害な影響を与えるものとされ、運動側からは高校入試の撤廃、高校全入などが唱えられたが、行政側は高校教育の多様化によっていわゆる学校格差を乗り越ろうとした。第2に、それまでの高校教育が大学の求める学生を必ずしも生み出し得ていないことであった。受験競争が必ずしも子どもたちの学力向上には結びつかず、それどころか偏差値依存型大学進学によって大学での不適応や学習意欲の低下を少なからず生み出してきた。第3に、高校教育が十分な職業人を輩出し得ていないという批判であった。労働集約的な産業の時代から情報技術を始めとする高度技術が大きな役割を果たす産業の時代へと移り、いわゆる産業空洞化とあいまって高卒者の求人は減少し、高卒就職者の比率も大きく低下してきている。第4には、それまでの高校教育は生徒たち自身

¹⁾ 北海道大学大学院教育学研究科教育計画講座修士課程修了（教育行政学研究グループ）

²⁾ 北海道大学大学院教育学研究科教育計画講座助教授（同上）

³⁾ 北海道大学大学院教育学研究科教育計画講座修士課程1年（同上）

によっても満足されていなかった。高校中退率が漸増してきていた。

普通科と職業学科に並ぶ第三の学科として導入された総合学科は、単位制や中高一貫教育と並ぶ高校教育多様化の代表的なツールの1つである。それは、高校入試時点で小学科を選択する必要がなく、高卒後の進路選択に結びつくように高校在学時代の学習を構成できるものであると同時に、高校偏差値序列の緩和・解消の方策となることが期待された。

本論文は、この総合学科に注目する。従来の偏差値序列化された体制のもとで、高校は進学中心校と進路多様校に分化され、進学校は受験中心の教育に陥り、職業高校では高校入試時点で特定の小学科の選択を強いられ、普通科進路多様校は高卒後の進路に関わりなく通常の普通科教育が実施されるに留まるという実態があった。これに対して、総合学科は、高校入試時点での細分化を避け、「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること」¹がその教育の特色として挙げられている。本論文は、総合学科のこの特色に、従来の高校教育がはらんでいる課題を乗り越えようとする意図を見、こうした総合学科創設の理念が、実際に現場でどのように実践されているのかを調査研究によって実証的に解明することを目的とする。

第1章 総合学科に関するこれまでの議論と分析の視点

1 新学科総合学科の創設理念

1948年の新制高等学校発足以来の新しい学科として誕生した総合学科が1994年に開設されるまでの簡略な経過は、以下の通りである。

1991年、第14期中教審答申で「総合的な新学科」として構想が始まり、1993年2月の高等学校教育の改革に関する会議第4次報告により総合学科という名称、および教育課程全般がほぼ確定する。同年3月「高等学校設置基準の一部を改正する省令」²が公布され、初等中等教育局長通達により「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科」を総合学科として定めた。当省令は1994年度から施行された。総合学科高等学校の誕生である。以後、総合学科は「高等学校教育改革のパイオニア的役割を果たすこと」³を期待され続けてきた。

資料⁴

臨時教育審議会答申

【第2次答申】——1986年4月23日

- ・個性の伸長を重視する観点に立つて教育内容の多様化を図るため、普通教育と職業教育の在り方の見直し
- ・生徒が自己の進路・職業などについて考え、さらに、将来に向かってその自己実現が図られるようにするため、進路指導の在り方を改善。
- ・豊かな人間性を育成するため、指導方法の多様化と評価の在り方の改善
- ・社会参加・ボランティア活動の導入

【第3次答申】——1987年4月1日

- ・多様化した高校生に対応するため、できるだけ高等学校教育の構造を柔軟なものにするとともに、多様な教育の機会を提供する方策等を進めることが重要な課題

第14期中央教育審議会答申——1993年4月19日

- ・今日、高等学校には中学校卒業生の95%に及ぶものが学んでおり、能力・個性・興味・関心、進路等の多様な生徒に対応するためできる限り幅広く柔軟な教育を実施
- ・自分の興味・関心や進路などに基づく主体的な学習を促し、それぞれの個性を最大限に伸長させるための選択の幅の広い教育を推進
- ・青年期を迎える高校生が、自己を見つめながら自我を確立し、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、人間性を豊かに育むことができる教育

これら審議会の答申によると、総合学科の理念は、自分の興味・関心や進路などに基づく主体的な学習を促し、それぞれの個性を最大限に伸長させることや、青年期を迎える高校生が、自己を見つめながら自我を確立し、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、人間性を豊かに育むことを目的に、選択の幅の広い教育を推進するものとされている（上記資料も参照）。

2 総合学科に関するこれまでの議論

以下では、総合学科に対する代表的な議論を確認することとする。

（１）岡部善平のカリキュラム・科目選択調査

岡部善平は、総合学科設置３年を経過した時点で、ある総合学科高校に関する３点の論文（1997a、1997b、1998）を書いている。調査対象校は、総合学科設置初年度に農業科をメインとした職業学科から総合学科へと転科した付属坂戸筑波大学高等学校（以下、「坂戸高校」と略記）である。これらの論文は、その後著書『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程』（風間書房、2005年）へとまとめられている。

岡部の総合学科坂戸高校における科目選択研究は、総合学科の系列⁵や「類」といったカリキュラム上の「枠」は、単に一定の知識カテゴリーとしてのみ設定されているのではなく、「生徒の進路を先取りし、進路選択の指針となるべく設定されている」ものであり、「生徒の科目選択は、進路展望に基づいた合理的な行為ではなく、むしろ逆に、生徒は『類』を中心に構成されている学校の選択状況に応じて、それに適合的かつ実現可能と予想される進路展望を構成していく」⁶というものであった。当時の坂戸高校においては系列が２つずつまとめられて、具体的にはⅠ類が農業系、Ⅱ類が工業系、Ⅲ類が家政系、Ⅳ類が商業系という枠が設置されており⁷、それが「類」と呼ばれていた。

岡部の研究は、カリキュラムを「知識枠」のもつ統制作用と生徒集団の科目選択過程における適応過程の相互作用としてとらえようとする、カリキュラム研究であり、対象を総合学科に取ってはいるが、単なる総合学科研究ではない。しかし、岡部の研究からは、坂戸高校生徒の科目選択は、学年によって変動は見られるものの、最終的には「類」（系列）内の科目を中心とした選択に帰着するものとされ、総合学科が単位制であり、その理念が生徒たちの自分の興味・関心や進路・職業などに基づいて主体的な学習と進路選択を行っていくものとされているにもかかわらず、理念を大きく裏切るものとしての総合学科の現実を読み取ることができる。

母体学科に職業（専門）学科を持つ総合学科では、このような傾向が多く見られるようであり、本論文作成に当たって聞き取り調査を行った愛知県の２校（後掲）にも見られた。ただし、岡部が明らかにした坂戸高校の科目選択実態は、総合学科の１つの現実として受け止める必要があるが、調査対象校が限定されており、総合学科のより包括的な姿を把握するには、さらなる調査研究が積み重ねられる必要がある。

（２）国民教育文化総合研究所による積極的な評価

国民教育文化総合研究所では、2003年度から継続して「若年層の雇用問題と職業教育のあり方を考える研究委員会」⁸が開かれている。同研究所『教育総研年報2004』の第１部「若年層の雇用問題と職業教育のあり方を考える」は、学校教育法第41・42条を引き、すべての者に対して共通のキャリア教育と、職業選択を念頭に置いた具体的な職業に関す

る専門教育が必要であるとの前置きをした後、総合学科について次のように触れている⁹。このような教育の実現にもっとも有利な条件をもっている高等学校は、総合学科ではないだろうか。すべての高等学校が総合学科（より正確には総合制）に移行していくことが、現状においてはもっともふさわしいと考えられよう。

日教組の地域総合中等学校の発想を受け継ぎ、普通教育と職業教育の双方を共に学べる総合制を実現するものとして総合学科を積極的に評価している。

なおここでは、総合学科の批判として「カリキュラムが焦点化されない」点についても考察が加えられている。自由選択制の持つ弊害は問題であるとして「履修制限の必要がある」と述べた上で、「総合学科では、系列を明確に生徒に示し、特定の専門内容を体系的に学修させる必要があろう」としている。

（３）小島昌夫論文における肯定的および否定的評価の紹介

教育科学研究会編『高校教育のアイデンティティー—総合制と学校づくりの課題』には、これまでの議論がわかりやすくまとめられている「総合学科をめぐって問われているもの」と題された小島昌夫の論文がある。そこでは、総合学科を肯定的にとらえる見解と否定的にとらえる見解の両方が紹介されている。

まず肯定的見解は以下の通りである。

共感・支持する意見

「総合学科の見通しについては普：総：職を2：6：2にするのが理想」
「5000の高校のうち1000や2000が総合学科になっても可笑しくない」
「条件整備が本当にしっかりされていくのであれば、普通、職業いずれへの選択も可能な総合学科は、コース制などとは違って、いまの生徒と社会の状況に適合しているところが多いので、積極的にすすめるべきだ」
——以上、文部省及び日教組側の発言
「就職目当てに大学を目指すより実務知識と企業家精神を持ってベンチャービジネスにとびこんでいく人材育成機関として総合学科に期待する」
「教養と専門性の両立を目指す総合学科に期待する」
——以上、経済同友会及び経団連（いずれも当時）の見解

次に、否定的見解を示す。小島によれば、「地域によっては強い反対運動も展開されてきた」という¹⁰。「地域の父母・保護者・住民の教育要求と運動によって対決」することは「総合学科の教育的意義とは別に重要である」と小島は述べている。

批判・疑問を示す意見（8項目を筆者：望月が要約）

（１）総合学科は労働力流動化に適応する人材養成として、財界の意図に即して政策的に提起されたのではないか。
（２）学習する中身が、普通科・職業科と比較して中途半端になるのではないか。
（３）単位制が原則となると、学習内容が安易に流れないか。また、HR（生活集団）が実質的に解体することで、青年期の人格形成の場としての学校の機能が弱められるのではないか。
（４）「専修学校での学習成果」「技能審査の検定結果」などの高校単位認定は従来の高校教育をなし崩しに解体するのではないか。
（５）「産業社会と人間」は、文部省の指導資料に沿った授業になりがちになる懸念がある。総合学科全体が企業の使いやすい労働力養成の役割を担うことにならないか。
（６）総合学科への学科転換による教員像の負担の覚悟が文部省・各都道府県にあるのか。総合学科は職業科高校のリストラのために導入されていくのではないか。
（７）総合学科は既存の普通科・専門学科の統廃合を合理的にすすめる「道具」として構想されたことになるのではないか。
（８）総合学科を視野に入れた学校改革を検討し、学校教職員集団が協議を重ねそれを構想していったとき行政側がどこまでそれを尊重し現場要求を生かす姿勢・態勢をもって民主的協議に応ずるのか。
——以上、全教・日高教側の意見

総合学科高校における科目選択と進路選択の調査研究

また、小島がまとめた「実施校の課題と問題点」も掲載しておく。

課題と問題点（筆者：望月が要約）

- ・ 県教育委員会と総合学科との関係——学校の自由度の大きいところと規制の強い所がある
- ・ 総合学科への転科または設置の理由の点検——トップダウンの傾向には下からの民主的運動で対抗
- ・ 総合学科と財界の労働政策との関連を批判的に考察する必要性
- ・ 生徒主体の科目選択——1年次の「産業社会と人間」だけで進路選択する力が養われるかどうか
- ・ HR（生活集団）と学習集団の不一致——単位制高校・総合学科に対する批判の要因となりやすい
- ・ 「産業社会と人間」の主導権の維持——学習指導要領で内容などを規定せず、現場の自由を保障する
- ・ 総合学科への転科または設置による教員加配と学校の性格づくり——先進校の実践から学ぶ¹¹

（４）総合学科「おかゆ学科」論

総合学科の誕生から2年目に出された全国高校生活指導研究協議会『高校生活指導 特集1 検証・総合学科②』を取り上げる。

ここで紹介したいのは『総合学科』は高校改革のパイオニアになりえるのか」という問題提起をしている多湖勲（当時東京都立荒川工業高校教諭）のレポートである。1994年末、筑波大学付属坂戸高等学校で行われた総合学科シンポジウムで、多湖は文部省（当時）に対して「（工業高校で教員を続けてきた身からすれば・引用者）総合学科は、極言すれば科目の“つまみ食い”であり、系統的な教育活動を放棄することになる。教育の自由化を進めすぎたと批判されているアメリカと同じ轍を踏まないか」と意見した。これに対して、鹿嶋研之助文部省初等中等教育局職業教育課調査官（当時）は、「総合学科が、食べやすいが、しんのない“おかゆ学科”になる可能性が確かにある。そのために学習の系列を示しており、将来の進路の裏付けがある科目選択をしてもらうために『産業社会と人間』を置いた」と返答した¹²。

このやり取りの中での多湖の懸念は、総合学科高校において「系統的な教育をどれだけ施せるのか」という点にある。当時の文部省は、総合学科に対して「特定の系列に所属させてはいけない」という「強い『指導』」¹³をしていたという。この圧力に対する総合学科の工夫として、入試形態にてこ入れした取り組み¹⁴も同時に紹介されている。多湖のような職業学科の教員が抱く総合学科に対する懐疑的な意識は現在も見られ、たとえば、総合学科ではどうしても「専門性が薄まる」、「まとまりのない勉強しかできない」、「体系的・系統性に欠ける」、「出口が不安」¹⁵という言われ方をされる。このような表現も皆、多湖のレポートにある「おかゆ学科」論として見ることができるだろう。

（５）「総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議」報告書

①評価（積極的な評価）

- ア. 在校生、卒業生、在校生保護者の多くが総合学科に満足している
- イ. 総合学科の教育の特色が評価されている
- ウ. 生徒は「やりたい勉強」をするために総合学科を選んでいる
- エ. 生徒は積極的な科目選択を行っている
- オ. 総合学科への進学を希望する中学生及びその保護者は多い
- カ. 卒業生の進路先からは、目的意識の明確さや学習・仕事への意欲の高さ、表現能力等が評価されている

②課題（消極的な評価）

- キ. 進路について考える時間をもっと必要である
- ク. 地域との連携や高校改革に関わる諸制度の一層の活用が必要である
- ケ. 学校運営に関わる諸問題への対応が求められている
- コ. 総合学科に対する中学生及びその保護者の認知度を高める必要がある

文部省は 1998 年 10 月、「総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議」（以下、「協力者会議」と略記）を設置した。2000 年 1 月に出された報告書『総合学科の今後の在り方について～個性と創造の時代に応える総合学科の充実方策～』の「総合的な意識調査」¹⁶の結果の箇所から、評価と課題として報告された事項を上に表示した。

3 本論文における分析の視点

本論文の視点は 2 つある。1 つ目は、総合学科創設の理念と岡部の調査研究による事例との対照的な姿に関わるものである。理念では、生徒が自分の興味関心・進路などにもとづいて自由に学習できるような教育環境を目指すべく、選択の幅をできるだけ広げることが重視されている。それに対し岡部が示す総合学科の事例では、上の理念に反し、生徒の科目選択は「類」や系列という所与の枠に強く規定されているとのことである。この相反する点を、本論文における調査分析の 1 点目の視点としたい。

もう 1 つの視点は、国民教育文化総合研究所『教育総研 2004』および日教組にみられる積極的な評価と、小島による整理のうちの「批判・疑問を示す意見」を主張する全教・日高教の意見との対立である。前者の主張は、「すべての者に対して共通のキャリア教育」と「具体的な職業に関する専門教育が必要」との立場から、総合学科はそのような教育の実現にもっとも近いところに位置するものとした評価が中心となっている。他方、後者の主張は、たとえば、総合学科では職業教育が中途半端になること、総合学科への転科は学校統廃合の道具であることや、総合学科全体が財界の求める使い捨て労働力を生み出す役割を担うようになることなどへの懸念である。高等学校教育の理想的な総合的教育であるとして支持する立場と、上記「理念」に対する懐疑的な懸念との対極的な言説を検証するのが 2 点目の視点である。

この 2 つの視点をもって、本論文は、総合学科が「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習」をいかに実践しているのかを事例研究的に明らかにしようとする。

第 2 章 調査高校の転科経緯とガイダンス科目

北海道内の総合学科高校は、北海道清水高等学校が 1997 年度から開設されたのを皮切りに、調査時点で 8 校が設置されている¹⁷。このたび調査対象とした総合学科は、北海道森高等学校（以下「森高校」）、北海道標茶高等学校（以下「標茶高校」）、北海道石狩翔陽高校（以下、「石狩翔陽高校」）の 3 校である。なお、3 校以外にも、愛知県立岩倉総合高等学校と愛知県立鶴城丘高等学校の管理職に対するヒアリング調査を行った¹⁸。以下では、まず各校の転科の経緯と、総合学科の進路指導・進路選択にもっとも大きな意味をもつガイダンス科目の特徴をヒアリングと収集資料より確認する。

1 北海道森高等学校

（1）転科の経緯

北海道内では 2 番目の総合学科高校である森高校の転科経緯は、少子化による生徒の減少が主たる契機となっている。森町をはじめ、近隣の砂原町・鹿部町での少子化が深刻化した 1994 年頃から、森高校は統廃合の対象となり、学校の存続自体が危うくなる。そこで

表 1 調査対象校の概要（2004 年時点）

学校名と募集定員	設置年	系列数	系列名	母体学科
北海道森高等学校	1999	7	人文科学系列／自然科学系列	普通科1
160名			国際教養系列／情報メディア系列	
※生徒調査協力校			情報ビジネス系列／生活福祉系列	家政科1
			食文化系列	
北海道標茶高等学校	2000	5	文理系列／地域環境系列	普通科1
160名			酪農科学系列／食品科学系列	酪農科1
※生徒調査協力校			アグリビジネス系列	農業土木科1
				農業機械化
北海道石狩翔陽高等学校	2000	7	人文社会系列／自然科学系列	普通科1
320名			地域国際系列／流通ビジネス系列	
※生徒調査協力校			情報システム系列／生活文化系列	
			健康福祉系列	
愛知県立岩倉総合高等学校	1999	6	人間科学系列／自然科学系列	普通科2
(旧 岩倉高等学校)			情報系列／流通管理系列	商業科1
			国際ビジネス系列／デザイン系列	経理科2
240名				情報処理科2
愛知県立鶴城丘高等学校	1999	7	人文科学系列／自然科学系列	農業科1
(旧 西尾実業高等学校)			国際ビジネス系列／生物生産系列	
240名			情報システム系列／環境デザイン系列	工業科1
			メカトロニクス系列	

3町で協議会を開き、高校が1校も存在しない状態では地域が廃れてしまうという強い危機意識と、地域で若者を育成したいという意欲を確認した。そして思い切って森高校の学科転換をはかり、新しいタイプの学校を作っていこうということを教育行政側に訴えたという。

森高校には長い歴史をもつ家政科が普通科に併置されており、それが時代の変遷とともにふるわなくなった状況が生まれていたため、この学科の資源を活かしながらの学校再編が求められる状況にあった。そこで行政側から提案されたのが総合学科であった。学校側は総合学科に転換するとはまったくの予定外だったということで当初はネガティブな反応だったが、行政側からの強力な働きかけがあり、地元の熱心な要望もあり、また学校存続のためには学校のあり方を思い切って転換するしかないという意見が反対論を押し切る形で転科が決まった。1999年度に総合学科が開設された。

（２）教育課程とガイダンス科目の特徴

森高校のカリキュラム上の特徴は、ガイダンス科目に充てる時間数の豊富さにある。文科省からの通達によれば、「『産業社会と人間』の時間は2～4単位」という指導がされている。ところが、ガイダンス科目をことに重視する森高校では「産業社会と人間」のほかにも工夫がなされている。具体的には1年次から3年次にわたるまで、授業時間内に進路指導の時間を設けている点が注目される（図2）。

具体的には、「産業社会と人間」2単位の他に“総合的な学習の時間”を「キャリアプラン」と名付けたガイダンス科目に充てている。これまでに出了された指導内容¹⁹によれば、「産業社会と人間」は原則として入学年次で実施することが推奨されているため、各校の教育課程ではたいていそれを遵守し、1年次に2～3単位程度で設けている総合学科が圧倒的に多い。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
1 年 次	国語総合			地理A		数学Ⅰ				理科総合B	化学Ⅰ	芸術選択		体育		保健	家庭基礎		英語Ⅰ			情報C		総合選択科目		キャリアプラン		産業社会と人間		ホームルーム活動	
2 年 次	国語総合		国語総合	世界史A		理科総合B	化学Ⅰ		体育			保健	選択科目(総合・自由)16単位																		
3 年 次	現代文		現代社会		体育		選択科目(総合・自由)22単位																								

図2 森高校の教育課程表(2003年度入学生用・新カリキュラム対応)

1年次で『産業社会と人間』を実施しても、その学習内容を2年次・3年次まで系統的につなげ難い点が総合学科の1つのネックとなっていると言われている²⁰。“総合的な学習の時間”をガイダンス科目に充てるなどして、「産業社会と人間」での学習内容をつなげていく工夫は次に紹介する標茶高校でも見受けられるものの、平成16年度の全国高等学校総合学科教育研究大会でもその活用の仕方について注目されていたように²¹、総合学科としての1つの課題であるといえる。

2 北海道標茶高等学校

(1) 転科の経緯

標茶高校は1946年、畜産学校を設立して地域の農家の子弟に専門的な知識を与えることを目指し、全日制の農業科と畜産科が各1学級の学校として設立された。その後、様々な変遷を見せながら1984年に全日制酪農科・農業土木科・農業機械科・普通科という転科直前の学科構成に落ち着く。

2000年度から総合学科としてスタートした標茶高校の転科経緯は、当校の抱えていた課題解決のための方策として、総合学科の理念がマッチしているのではないかと、という発見に始まる。もちろん、北海道教育委員会など行政側からの提案もあったが、当校の教育振興会²²および標茶町議会での議論の末、「地域からの要望」²³という形にまとめ、総合学科への転換に向けた具体的な準備が進められるようになった。1998年秋からは「総合学科を学ぶ集い」や「総合学科を考える会」といった会合が、教育関係者を中心に町民の間で何度も持たれ、町としての合意形成が図られ、転科の実現に至る。

(2) 教育課程とガイダンス科目の特徴

森高校と同様、標茶高校でも“総合的な学習の時間”をガイダンス科目に充てており、2年次で「自己探求」、3年次で「課題研究」を実施している。

標茶高校の「学校経営方針」には、「生徒の自己実現を支援する」という教育方針が見られる。ガイダンス科目はここに位置づけられており、「すべての教育活動を通して生徒の自己発見や自己探求に努めさせ、自己形成や自己実現を達成させる。そのため、『産業社会と人間』『自己探求』『課題研究』の科目を中核とした日常学習の充実と、担任・キャリアガイダンス部との有機的な連携に努める」との目標が掲げられている。

1年次から3年次までのガイダンス科目の成果は、学校行事や授業の締めくくりに相当する節目ごとに書き留められる、生徒のレポートに表れる。このような3年間の積み重ね

は、標茶高校・周辺中学校・地域、そしてもちろん生徒自身にとっての大切な財産となると考えられている。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1 年 次	国語総合				世界史 A		数学Ⅰ				総合理 科A		体育			保健	英語Ⅰ				家庭基 礎		情報A	環境科学 基礎		産業社会と人 間				ホー ム ル ー ム 活 動
2 年 次	現代社 会		体育		保健	芸術選 択		※自己 探求		選択科目(総合・自由・理科)20単位																				
3 年 次	地理A		体育		※課題研究			選択科目(総合・自由)22単位																						

図3 標茶高校の教育課程表(2004年度実施版)

3 北海道石狩翔陽高校

(1) 転科の経緯

石狩翔陽高校は、札幌市の北隣りに位置する石狩市にその所在を置く。石狩市の前身である石狩町では、1970年代後半から札幌市のベッドタウンとして都市化が進行し、石狩湾新港工業団地も建設されるなど、札幌圏における流通経済の拠点としての役割も期待される地域であった。このような石狩町の発展と高校進学率の上昇に伴い、地域社会の強い要望によって1978年4月に石狩高校が普通科として開校された。

しかし、「入学する生徒の多様化などから、同校でも高等学校教育に関わる様々な課題が直撃することとなり、教師も生徒も苦悩の日々」²⁴が続く。このような現状の打開のため、教育改革の動向にも呼応して「特色ある学校づくり」を模索、1997年度末より「石狩高校の将来像を考えるプロジェクト」が発足する。そこで同校の教育課題が検討され、「社会の激しい変化に対応するには、『自ら学ぶ意欲と思考力・判断力・表現力など、社会の変化に主体的に対応できる能力の育成』が必要であるとの確認がされる」²⁵。このプロジェクトの検討を基に、「学校を変えよう」との機運が職員間で熟成され、その1つの方策として「総合学科への転換」が真剣に議論され始める。以降、1999年9月に職員会議で総合学科転換が決定され、「総合学科設立委員会」の組織化等を経て、2001年4月より総合学科へ転換、同時に学校名を北海道石狩翔陽高等学校と改めた。

(2) 教育課程とガイダンス科目の特徴

1年次の「産業社会と人間」、2年次・3年次の「総合学習」(“総合的な学習の時間”)では、科目選択に関するガイダンスを行うほか、「ライフプラン」作成(後述)や上級学校・企業訪問、インターンシップや体験学習、「課題研究」(後述)などといった取り組みの準備が行われる。

1年次に行われる「ライフプラン」作成とは、1年間をかけて自己の個性・興味関心を確かめ、自己の将来像を「ライフプラン」として形に残す作業である。これがその後の科目選択に関する指針にもなっていく。3年次に「課題研究」が行われ、この実践を通して3年間の学習成果を振り返り、かつ「課題研究」の取り組み自体が進路実現への最終的な力量形成として結実していく。この「課題研究」では、一般公開の「課題研究」発表会が

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1 年 次	国語総合				現代社会		数学Ⅰ			数学 A	総合理 科A		体育			保健	芸術			英語Ⅰ			家庭基 礎		情報C		産 業 社会	と人間	ホー ム ルー ム 活 動	
																												総合選択		
2 年 次	体育		保健	理科総合 B		総合学 習	世界史B			総合選択科目																	自由選択科目			
							世界史A																							
3 年 次	体育		総合学 習	日本史B			総合選択科目																	自由選択科目						
				日本史A																										

図4 石狩翔陽高校の教育課程表（2004年度実施版）

毎年開催される。各教科の生徒代表が1～3名選出され、自らの研究成果を一般聴衆の前でプレゼンテーションする。反応は上々で、「見学に来られたお客様や在校生から大きな賞賛の拍手が起こり、会場が熱気に包まれ」²⁶ていたとのことである。

第3章 総合学科の評価と課題

1 調査の概要

本論文の目的は、先に述べたように、総合学科が「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習」をいかに実践しているのかを明らかにするところにある。総合学科に関する先行の研究や評価では、「類」や系列の規定性が顕著に表れている事例が見いだされ、また「つまみ食い」的な授業科目選択が行われる危惧が表明され、生徒がある枠組みの中で科目選択を強いられるものという像となんらまとまりある学習を行い得ないとする像の2つの総合学科像が提出されている。いずれにしても、総合学科においては、その所期の理念とは異なり、生徒たちは主体的な科目選択にもとづく有意義な学習を行いづらいという指摘としてこれらの研究と評価は受け取ることができる。

こうした論点を深めるには、またその際、生徒たちの授業科目選択の実態とカリキュラムおよびガイダンス科目のあり方に焦点を当てた総合学科高校の事例研究を増やすことが求められる。そこで、本論文では、記述のように対象校のカリキュラムとガイダンス科目のあり方を管理職および担当教諭へのインタビューによって聞き取るとともに、3年生の生徒に科目選択のあり方を中心とするアンケート調査を実施した。対象者数、回収率と、アンケートの基本的な項目は次の通りである。以下では、この調査結果をまとめた。

対象 森高校3年次生徒（145名中、130名からの回答が得られた →回収率89.6%）

標茶高校3年次生徒（131名中、122名からの回答が得られた →回収率93.1%）

石狩翔陽高校3年次生徒（289名中、257名からの回答が得られた →回収率88.9%）

内容 問1：基本属性

問2：小中学校時代の教科についての感想

問3：高校選択の時期・理由と総合学科の認知度合い

問4：科目選択決定プロセス

問5：ガイダンス科目について、

問6：進路希望と将来の職業展望

問7：総合学科で学んだ感想

2 総合学科に対する全体的な評価

まず、全体としての評価（調査票²⁷：問7①「総合学科をどのように評価するか」）をみてみる。この問いでは10の選択肢の中から複数回答で答えてもらった。質問項目については表2を参照されたい。図5は森高校の、図6は標茶高校の、図7は石狩翔陽高校の集計結果である（図中の「選択肢 No.」と表2の番号は一致している）。

表2 総合学科で学んできた感想・評価の選択肢

選択肢No.	選択肢	
1	まとまりのある勉強が出来て良かった	肯定的な 選択肢
2	社会に出て多くの人と触れ合うことが出来て良かった	
3	進路について真剣に考えられて良かった	
4	いろいろな科目の実習を選択できて良かった	
5	「総合学科」の学校を選んで良かった	
6	あまりまとまった勉強が出来たように思えなかった	否定的な 選択肢
7	期待していたほど自分の視野が広がらなかった感じがする	
8	系列にもとづいて科目選択しても、専門性が身についたと思えない	
9	いろいろな科目を選択できないという実態があり、残念だった	
10	「総合学科」のことが良くわからなかった	
※以下、石狩翔陽高校のみの選択肢（上記選択肢No.4は石狩翔陽高校の質問項目に含まない）		
4※	実習や実験をとまなう科目が多く、他校では学べなさそうなのがたくさん出来た	
A	資格をたくさん取得できたり、専門性を身につけることが出来た	
B	講演やたくさんの体験学習が出来て良かった	
C	科目選択の修正を出しても出来なくて困った	
D	総合学科で学んでも進路実現には結びつかなかった	

石狩翔陽高校の質問項目が、他2校と若干異なる²⁸。森・標茶高校での選択肢No.4の質問項目（「いろいろな実習を選択できて良かった」）は、石狩翔陽高校では質問項目として取り扱わなかった。しかし、それに類似した質問項目である「実習や実験をとまなう科目が多く、他校では学べなさそうなのがたくさん出来た」を、森・標茶高校での選択肢No.4の結果と比較しやすくするために、表2の選択肢No.では「4※」と表記しておいた。なお、選択肢No.A・B・C・Dは石狩翔陽高校でのみ実施した質問項目である。

まず、3校で共通している点は、「4.いろいろな科目の実習を選択できて良かった」（石狩翔陽高校では類似の選択肢「4※.実習や実験をとまなう科目が多く、他校では学べなさそうなのがたくさん出来た」）を選択する生徒が比較的多い点、選択肢1～5までの（表2参照）、比較的肯定的な選択肢に対する回答の総数が多い点である。先に触れた協力者会議の「総合学科に対する評価は高い」という結論は、本調査では在校生においても確認できたことになる。

比較的否定的な意味合いの選択肢では「9.いろいろな科目を選択できないという実態があり、残念だった」を選ぶ回答が目立った。

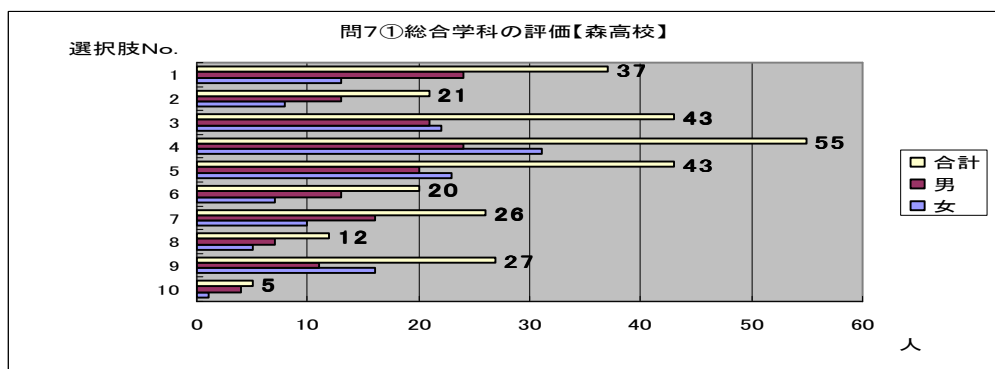


図5 全体的な評価【森高校】（複数回答）

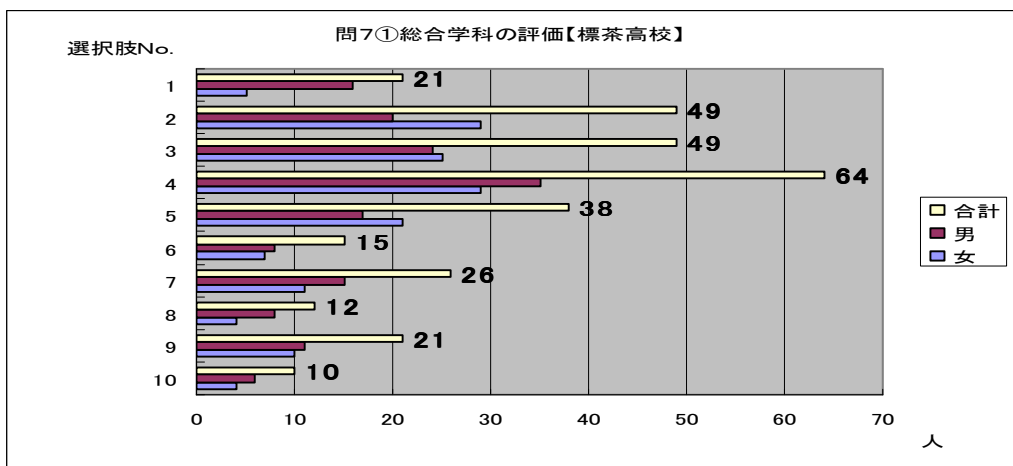


図6 全体的な評価【標茶高校】（複数回答）

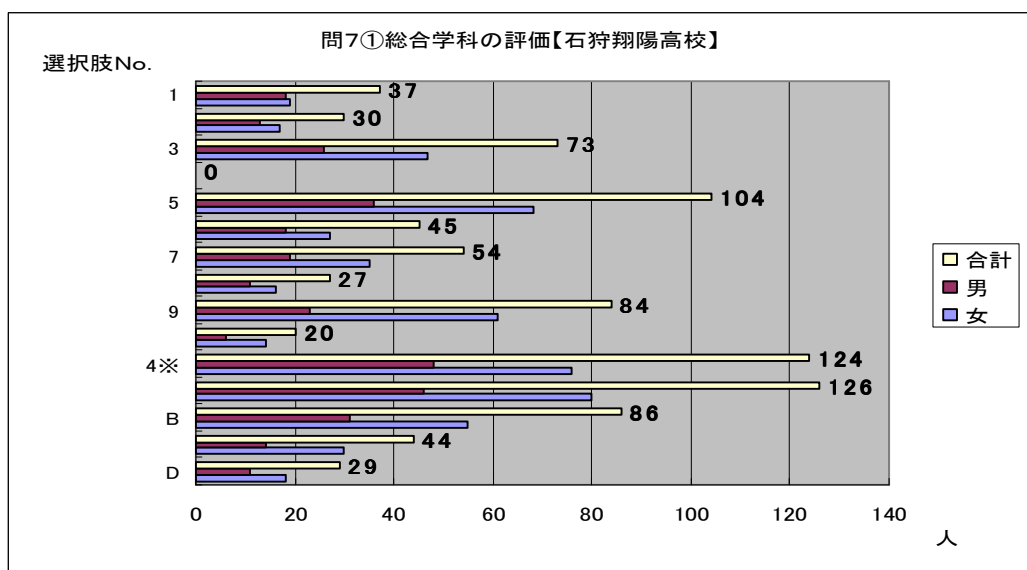


図7 全体的な評価【石狩翔陽高校】（複数回答）

3 科目選択における系列への依存度

次に、生徒の科目選択は、系列に沿って形式的に行われているのか否かを検討する。まず、生徒の回答をもとに次のような観点でグループ分けし、以降はクロス集計結果を参照しながら分析を加えていくこととする。

観点A 総合学科を希望して高校を選んだか否か

観点B 科目選択の際に系列を重視（意識）したか否か

—— 系列重視【系列○】派、または、系列にこだわらない【系列△】派

（１）森高校の場合

Aでは、22%が総合学科だからこそ森高校への進学を希望、78%が総合学科とは関係なく森高校に進学したと答えている（調査票：問3④「進学理由」）。それぞれの進路希望を見ると、いずれも約6割が就職を、3割強が進学を希望している生徒である。

Bでは、系列○派が41%、系列△派が59%であった（図8）（調査票：問4⑥「系列を重視したか」）

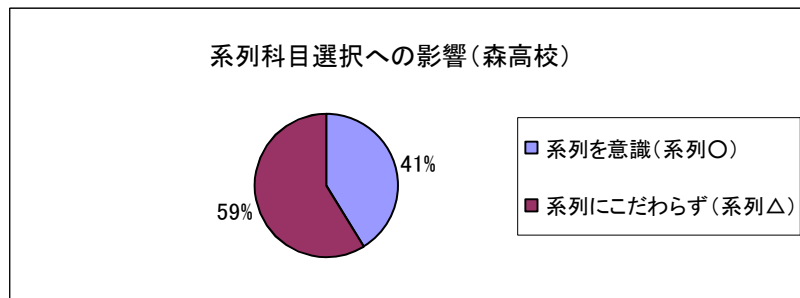


図8 【森高校】観点Bの割合（N=130）

以上のA・B2つの観点をクロスさせ、森高校生の系列の捉え方を概観するため、以下の結果（図9・10）を検証する。

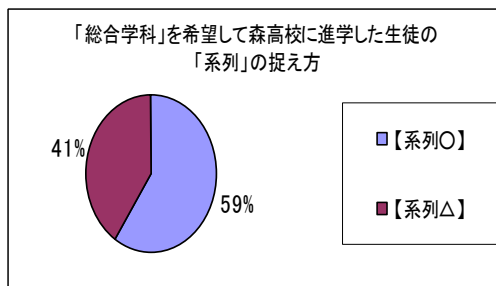


図9 総合学科希望者と系列（森）

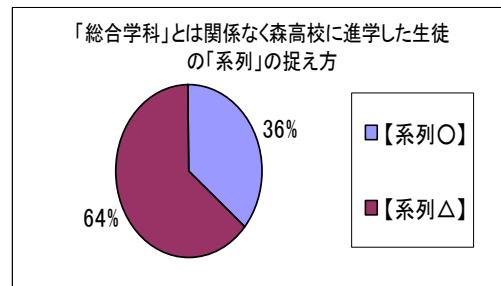


図10 総合学科を意識しない生徒と系列（森）

総合学科希望者（以下「希望者」と表記）は、系列を意識して科目選択を行う生徒の割合が高い。中学校時の進路選択の際に、総合学科の特徴をひとつおり把握できていた生徒には、森高校の系列に対する知識を有する者も多く、「森高校の系列の中に興味のある分野があったから」との志望動機を選択した生徒が16名存在する。一方、「希望者」以外のグループは、志望動機の最多回答が「近いから」であり、総合学科の認知度合いも明らかに低い²⁹。

（２）標茶高校の場合

Aでは、28%が「希望者」、72%が総合学科とは関係なく標茶高校に進学したと答えている（調査票：問3④「進学理由」）。それぞれの進路希望を見ると、「希望者」の47%ずつが就職・進学を希望している。「希望者」以外の生徒では、40%が就職を、57%が進学を希望しているという結果であった。

Bでは、系列○派が27%、系列△派が73%と、森高校より開きが大きかった（図11）（調査票：問4⑥「系列を重視したか」）

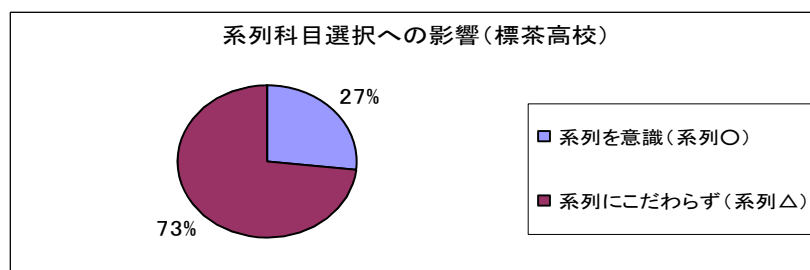


図11 【標茶高校】観点Bの割合（N=122）

以上のA・Bの観点をクロスさせると、下図のような結果（図12・13）が得られた。

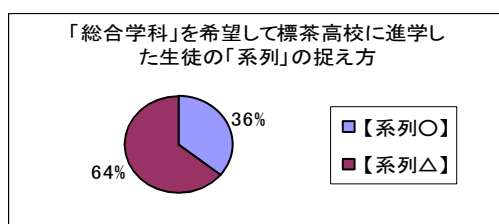


図12 総合学科希望者と系列（標茶）

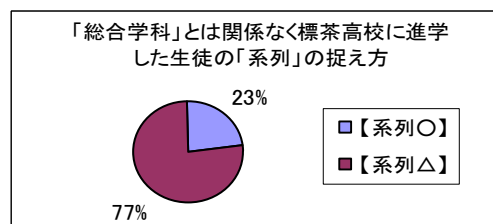


図13 総合学科を意識しない生徒と系列（標茶）

（３）石狩翔陽高校

Aでは、56%が「希望者」、44%が総合学科とは関係なく石狩翔陽高校に進学したと答えている（調査票：問3④「進学理由」）。

「希望者」が過半数を上回った結果は、他の2校では見られない顕著な特徴である。他の2校（森・標茶）はいずれも農村地域の総合学科であり、それに対し石狩翔陽高校は札幌圏内に位置するいわゆる都市型の総合学科である。別の質問項目において、「希望者」以外の生徒に、総合学科とは関係なく石狩翔陽高校を選んだ理由をたずねた（調査票：問3④-3）ところ、「とくに自主的に選んだわけではなく、成績の関係で」の割合が最も高く（65人、約4割）、「近いから（地元だから）」の割合が他の2校に比べ相対的に低い（29人、18.7%）という結果も見られた。これらの結果からも、都市型総合学科高校ならではの特徴が垣間見える。

それぞれの進路希望を見ると、「希望者」の約8割が進学を希望、15%ほどが就職志望である。「希望者」以外の生徒でも、7割以上が進学、約2割が就職希望となっており、他の2校に比べると進学希望者の割合が高いという特徴を持つ。

Bでは、系列○派が30%、系列△派が55%であった（図14）（調査票：問4⑥「系列を重視したか」）。ただし、石狩翔陽高校では系列に関する質問で無効回答が含まれているため、他の2校と単純に比較することができない点に留意する必要がある。

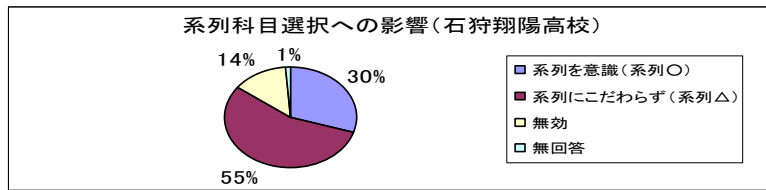


図 1 4 【石狩翔陽高校】観点 B の割合（N=257）

A・B の観点をクロスさせると、下図のような結果（図 1 5・1 6）が得られた。

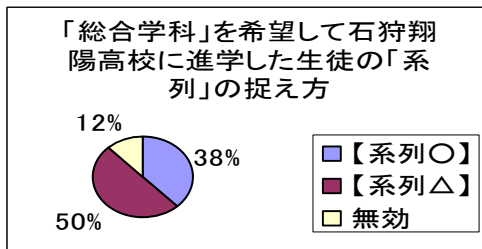


図 1 5 総合学科希望者と系列（石狩）

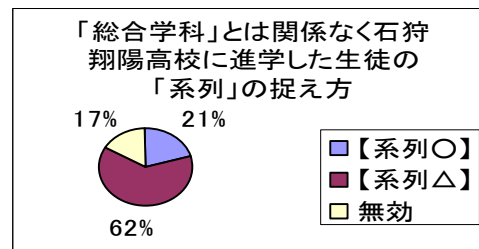


図 1 6 総合学科を意識しない生徒と系列（石狩）

（４）小括

以上のことから、生徒は科目選択に際し、系列に忠実に沿って形式的に行っている訳ではなく、むしろ系列△派が多数派である。これは 3 校に共通していえることで、総合学科「希望者」グループにも系列△派は多数存在することが判明した。特に標茶高校においてその傾向が顕著である。

4 科目選択の視点の検証

さらに、総合学科「希望者」とそれ以外の生徒の科目選択の視点を細かく検証するために、系列○派には「科目選択に際して系列を意識した理由」を、系列△派には「自分の考えの根拠」をたずねた。

（１）森高校の場合

まず、森高校の結果は次のとおりである。（図 1 7・1 8）

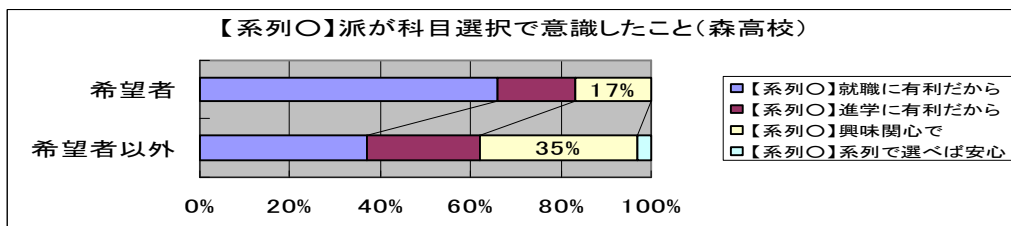


図 1 7 「系列」を意識した理由（森）

系列○派の「希望者」には、就職や進学を意識して系列に沿った科目選択をした生徒が 8 割以上存在することが分かる。また、「希望者」以外の生徒には、興味関心にもとづいて科目選択した生徒が「希望者」（上段）よりも多く見られる。系列○派でありながら、興味関心にもとづくとは、たとえば（森高校で考えると）「自分の興味関心が福祉の分野に集中しているから、生活福祉系列の科目を中心に科目選択をした」という例が考えられる。

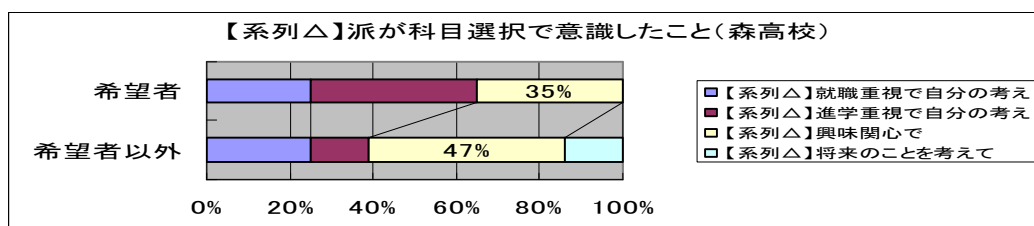


図 1 8 「系列」にこだわらない科目選択で意識したこと（森）

系列△派の「希望者」は、就職あるいは進学という目的意識を持ちながら、自分の意思で科目選択している生徒が 6 割以上存在する。一方、「希望者」以外となると、興味関心で科目選択する生徒がかなり増加する。

（２）標茶高校の場合

次に、標茶高校の結果を示す（図 1 9 ・ 2 0）

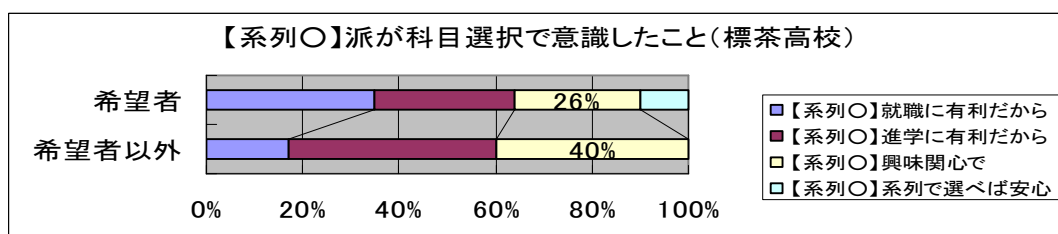


図 1 9 「系列」を意識した理由（標茶）

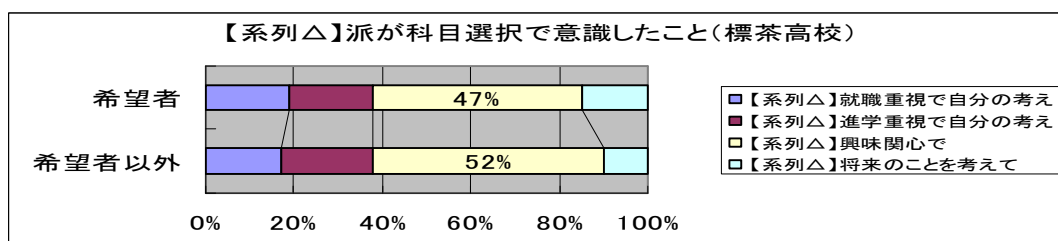


図 2 0 「系列」にこだわらない科目選択で意識したこと（標茶）

系列△派の「希望者」以外（下段）、「52%」と記した興味関心に基づいて科目選択する生徒の割合が非常に高い。

（３）石狩翔陽高校の場合

最後に石狩翔陽高校の結果を見てみる。（図 2 1 ・ 2 2）

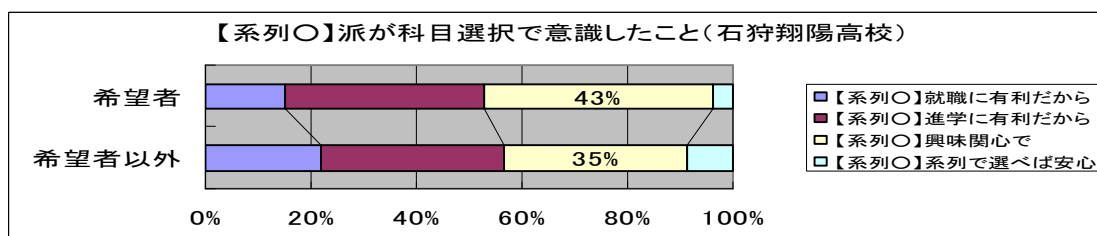


図 2 1 「系列」を意識した理由（石狩）

この石狩翔陽高校の系列○派の場合のみ、「希望者」以外（下段）より「希望者」（上段）の方が、「興味関心」派の割合が僅かながら高い結果となった。「希望者」（上段）の「興味関心」派の割合は4割以上であり、すなわち、自ら望んで総合学科の高校を選び、科目選択の際は系列を意識しながらも、それを就職や進学に直接結びつけるのではなく、興味関心で科目選択を行う生徒が、かなりの割合を占めていることになる。

また「希望者」以外（下段）においても、「興味関心」派が「進学重視」派と並び35%と最も割合が大きく、「興味関心」派が一番大きい割合を占めている傾向は他2校に比べて変わらない。

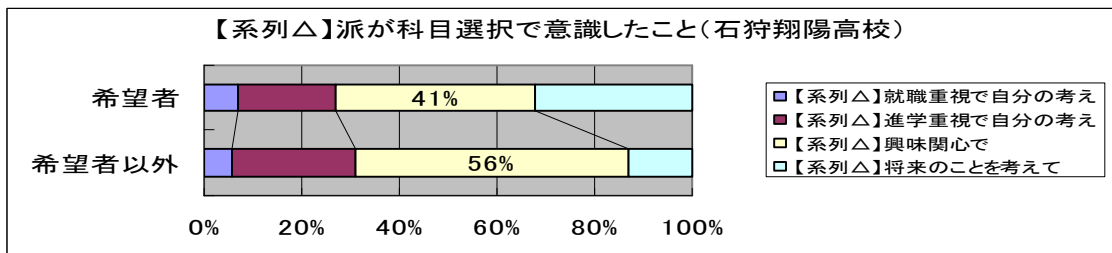


図2.2 「系列」にこだわらない科目選択で意識したこと（石狩）

系列△派の場合でも、興味関心で科目選択を行った生徒の割合が非常に目立つ。特に「希望者」以外（下段）の「興味関心」派は、過半数を超えている。

5 得られた知見

（1）調査結果の傾向

以上の結果から、調査から見られる傾向を次の3点にまとめた。

1. 総合学科「希望者」には、学校が設置した「系列」について「希望者」以外の生徒よりも「系列」に意味を見出しているものが多い。しかし、全体としてみると森高校で59%、標茶高校で73%、石狩翔陽高校で55%という多数派が「系列にこだわらない系列△派」であるという傾向がある。
2. 系列○派と系列△派との違いにかかわらず、「希望者」以外の生徒には「興味関心」にもとづいて科目選択をするものが多い傾向にある。
3. 「希望者」以外の系列△派には「興味関心」で科目選択をする者が割合としてもっとも多い。

本論文のクロス集計からは、総合学科の生徒たちは、①総合学科を希望し、系列を重視する者、②総合学科を希望し、系列にこだわらない者、③総合学科を希望せず、系列を重視する者、④総合学科を希望せず、系列にこだわらない者、の4つに分類することができるが、そのうちの①は、総合学科の特色をおおむね理解した上で、なおかつ総合学科を希望し入学してきている生徒であり、そのような生徒というのは系列を配して進路意識を深化させようという総合学科の「理念」を上手く生かしている層だといえるだろう。自身が思い描く将来のキャリアプランを現実化させてゆく契機となるような系列での学習やインターンシップなどの体験は、このような生徒に対し、とくに有効に作用すると考えられる。また、ある1つの分野に限定せずとも、総合学科には「幅広い選択肢」が用意されているため、人生設計を多面的に彩ることができる機会もあると考えられるだろう。よって、こ

これらの生徒は総合学科の理念を体現するような存在といえよう。

（２）「興味関心」派の検討

しかしながら、調査対象校においては３校とも、総合学科の「希望者」以外の生徒が相当数存在し、科目選択では系列△派が多数を占めている。その点に留意しながら、とくに「興味関心」にもとづいて科目選択をした生徒に以下、注目してみる。

表３は、森高校回答者全体（１３０名）から「興味関心」派のみを抽出して観点Ａ・Ｂにそれぞれを分類したものである。

前述の調査から見られる傾向の３点目に該当する生徒とは、最下段の系列△派３０名のことを指す。この３０名の進路希望は右端のとおりで、森高校は全体として就職希望者の多いが、とりわけここに「就職」希望が集中している。

標茶高校においても同様の傾向が見られる。最下段の系列△派２６名の進路希望を見ると、就職希望者も９名と多いが、進学希望の１５名が特徴的である。そのうち、１３名が専門学校への進学希望である。アンケートでは、４年制大学への進学希望者の多くは、系列○派においては「進学に有利だから」という理由で、系列△派においては「進学することを重視して」との考えで科目選択をしている。

しかし、ここにはもともと総合学科を希望しておらず、系列にもこだわらない層が専門学校進学希望者として集中しているという実態がみられる。

石狩翔陽高校の場合もやはり同様

である。「希望者」以外の系列△派、３８名が最も多数を占める。ただし、進路希望先に関しては、生徒の約８割が進学希望者であるという状況のためか、どの分類でも進学が多くなっており、目立った特徴は見られなかった。

以上のことから、「興味関心」派では、とくに「希望者」以外の、さらに系列△

派に該当する生徒が３校ともに最多であることが判明した。この層は、総合学科の特色である幅広く豊富な選択肢を活用して「個性の伸長」を図っているとみることもできるが、「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚」の深化には至らなかったとみるこ

表３【森高校】「興味関心」派の性質（数字：人）

興味関心派 50 (全体の 38%)	総合学科希望者 7	系列○ 3	就職	2
			進学	0
			未定	1
	希望者以外 43	系列△ 4	就職	0
			進学	2
			未定	2
		系列○ 13	就職	9
			進学	4
			未定	0
系列△ 30	就職	23		
	進学	6		
	未定	1		

表４【標茶高校】「興味関心」派の性質（数字：人）

興味関心派 41 (全体の 33%)	総合学科希望者 9	系列○ 2	就職	1
			進学	1
			未定	0
		系列△ 7	就職	4
			進学	3
			未定	0
	希望者以外 32	系列○ 6	就職	3
			進学	3
			未定	0
		系列△ 26	就職	9
			進学	15
未定			2	

表５【石狩翔陽高校】「興味関心」派の性質（数字：人）

興味関心派 98 (全体の 38%)	総合学科希望者 52	系列○ 23	就職	2
			進学	20
			未定	1
		系列△ 29	就職	5
			進学	23
			未定	1
	希望者以外 46	系列○ 8	就職	0
			進学	6
			未定	2
		系列△ 38	就職	7
進学			29	
未定			2	

ともできる。そこで、本調査の中にある、複数回答のできる「時間割作成のポイント」をたずねる質問（調査票：問4⑤）の回答を分析すると、「何となく作った点」のみを単独回答している生徒は3校ともに「希望者以外」が8割以上を占めていること、さらに「将来的に就きたい職業」をたずねる問い（調査票：問6②）で「未定」を選択している者の多くが上の層に属していることが確認できる。

（3）調査分析の限界

ただ、ここまで「興味関心」に注目して見てきたが、このように答えた生徒の意図に関して、本研究の調査ではその内実が十分には明らかにできていない点に注意が必要である。例えば、科目選択で意識したことをたずねた際に「興味関心で」と答えた生徒は、確かに「進学のことを考えて」や「就職のことを考えて」等の他の回答選択肢と比較して、この「興味関心で」という回答が現在の自分の内心に最も適合していると考えてこの選択肢を選んだのであるが、そのことが一切進学や就職、さらには将来の進路のことを考えていないことを意味するとはいえない。「興味関心」と進学や就職は両立するし、イコールである場合も想定される。

岡部は1997年に、従来の総合学科の諸研究が、『総合学科』の生徒は科目の選択を行う以前から何らかの関心をもっており、その関心によって、学校側の提示する選択科目群の中から自主的に科目を選択しうる」という前提のもとに進められ、その前提を不問に付していることに対して、批判を加えている³⁰。その後に発表した2005年の著書では、以下のような知見を述べている。

生徒集団はその場その場の選択状況からの脱却を繰り返しているうちに、いつの間にか関心や進路展望を構成していく（中略）、…学年が進み、選択科目の授業を実際に受けたり、科目変更や進路選択といった新たな選択の岐路に直面するなど、自らを取り巻く状況が変化するのに伴って、生徒集団は以前とは異なる関心や進路展望を構成していく。これを換言すれば、生徒集団ははじめから明確な関心や進路展望をもっていて、それに基づいて科目選択をするのではなく、漠然とした興味に基づいて行った選択行為の結果こそが、生徒集団の間に何らかの関心や進路展望を生み出すのである³¹。

生徒の科目選択行為を「興味関心に基づくもの」かそれとも「進路展望に基づくもの」かで二分して分析する枠組みでは複雑な科目選択行為の実態を捉えきることができず、本調査もこの点を深められていないという限界をもっている。各生徒がどのような「興味関心」を持って科目選択をしたのか、このことをさらに深く追求し、「興味関心」の内実を明らかにするためには、別途方法を変えて詳細に調査を行う必要がある。

終章 総合学科における科目選択と課題

1 生徒の科目選択と系列

本論文での調査した北海道内の3校における科目選択の場面をみると、生徒は学校側が用意した「枠」（系列）に過度に縛られることなく科目選択を進めていた。いずれの学校もガイダンスにおいて、系列通りに科目を選択する必要はないと指導し、生徒たちに系列というものをほとんど意識させないようにまで徹底している学校もみられた。調査校はいずれも、指導方針上は総合学科創設時の科目選択の指針を守っており、このようなタイプの学校においては、生徒の「興味関心」を生かした自由な科目選択を行いうる環境が

用意されている、ということができよう³²。

本論文の調査結果の要点は以下のようによい。

- ①生徒の主体性に任された科目選択は、全体として生徒からの評価が高い。
- ②総合学科を希望して進学してきた生徒には、系列を重視して科目選択をするもの（系列○派）が多い。
- ③総合学科とは関係なく進学してきた生徒には、系列にこだわらないで科目選択するもの（系列△派）が多い。
- ④調査対象の総合学科生の全体としては、系列にこだわらないで科目選択をするもの（系列△派）が多い。
- ⑤調査対象の総合学科生全体から見て、「興味関心」で科目選択する生徒が多い。
- ⑥「興味関心」で科目選択をした生徒の中には、「興味関心」以外の視点で科目選択をした生徒に比べ、「何となく作成した点」を時間割のポイントにする生徒や、将来的に就きたい職業を「未定」と回答する生徒が多く含まれる。

本論文は、ある年度の3年次の生徒だけにアンケートを行ったものであり、岡部の研究のように3年間の生徒の科目選択のプロセスを追っておらず、また生徒の「適応行為」にまで検討が及んでいないという弱さがあるが、岡部の研究で示されたような、生徒が最終的に一様に「枠」に規定された科目選択をせざるを得ないという現実、本研究調査対象校の道内3つの総合学科においては見られなかった。枠の設定によって生徒たちの「進路展望に基づいた合理的な行為」が妨げられるという事態が、岡部論文のフィールドである坂戸高校の事例からは見出されたが、それがわが国の総合学科全般に見られるものかどうかはさらなる実証研究が必要であろう。

少なくとも本研究の調査対象校では、系列にこだわらずに科目選択をした生徒が多数派であった。生徒たちは、総合学科の特色を発揮した教育——学校内外を問わない幅広い学習の機会——を高く評価している。総合学科は、いわゆる「進路指導」のような切り取られた場面だけではなく、その教育実践全体をもってして「進路選択」について考える機会を生徒に対して与える機能を果たしているというべきであり、大きく見て生徒たちは、各々の個性・能力を総合学科で繰り広げられる学習の場・体験の場においてあれこれと試しながら、様々に進路を模索しているのではないだろうか。

ただし、「進路についてじっくり考える」ことに関しては不十分であるとする層の一定数の存在も認識せねばならない（調査票：問5②ガイダンス科目「産業社会と人間」に対する評価より）。このことは、先にみた協力者会議の報告書にも課題として挙げられている。上述の「幅広い学習の機会」が「進路選択について考える機会」の豊かさにつながるという総合学科の長所は、「進路の自覚」を収束させるための何らかの機能が付属されることでより強化されるが、逆に言えば、収束させる機能をさらに模索することが、現在の総合学科の課題であるということである。

一方、愛知県立の総合学科校は、坂戸高校と同様に、「枠組み」に沿った科目選択を進めている学校であった。愛知県下で最初に転科した岩倉総合高校では、系列ごとに「お勧め科目」のセットが生徒に提示されている。また、2年次から3年次にかけての系列変更も「今までの積み重ねが無駄になるから」との理由で、原則として認められていない。本年度から総合学科に転科した鶴城丘高校においても同様である。鶴城丘高校は前身が農・工

の職業（専門）高校であったこともあり、受験生のほとんどが入学前から志望する系列を決めているという。それは、近隣市町に安定した就職先³³が多く存在する当地域の高卒労働市場の中で、当校が西尾実業高校時代に果たしてきた「出口の保障」に対する評価でもあるようだ³⁴。当校の管理職および系列主任教諭は、序章でみた「おかゆ学科」に成り下がることの無いよう、専門的な職業教育を系統的に施すことを重視していた。全国的には、愛知県立の総合学科のようなタイプの学校も存在するため、「総合学科の課題」と主張するためには、より広い視野で検討する必要がある。

2 総合学科の課題

国民教育文化総合研究所年報は、「高校における『職業に関する専門教育』とは、産業界で必要とされる職業能力の形成という目的が主なのではなく、青年期における最も重要な発達課題としての職業的自立を促すという目的が主である」³⁵と述べている。日本の高校における「職業に関する専門教育」は、ある一定程度の専門性を帯びつつ、しかも「職業的自立」を促し得るものであるべきだという主張が、同年報の根本には据えられている。同年報の総合学科に対する肯定的評価は、そうした「職業的自立」を促進するものとして積極性が同学科に見いだせるという判断に基づいているといえる。ただし、先に見たとおり、同年報は「カリキュラムの焦点化」が総合学科の問題点であると述べ、その対策として「履修制限の必要」や「特定の専門内容を体系的に学修させる必要」を説いている。

批判・懸念を示す全教・日高教等の論調は、「企業の使いやすい労働力養成の役割」を総合学科が担うのではないかといい、財界や政府の労働政策との関連を憂えるものと、これまでの高校教育の実践をなし崩しにするのではないかといい総合学科の学習内容に踏み込んだものとに分けられる。前者については、トップダウンによる転科か否かの検証や、地域の高卒労働市場を概観することによって、その総合学科の性格・位置づけが把握できるだろう。

本研究の調査対象校について考えてみると、愛知県下で最初に転科した岩倉総合高校は、パイロット校として県の肝煎りで設置されたが、その他はさまざまな事情で転換がなされており、総合学科がすべて都道府県のトップダウンによって設置されているのではない。次に、総合学科が安易な労働力養成の場になっているのではないかという懸念については、調査対象校各校の「産業社会と人間」等のガイダンス科目の内容はもちろんのこと、各校の進路指導をみても、たとえば北海道標茶高校ではトライアル雇用や非正規採用を敬遠しているように、使い捨て労働力を生み出さないような努力が行われている。

問題は総合学科の教育課程、および学習内容である。国民教育文化総合研究所年報が総合学科に唯一、注文をつけるのもこの点であり、岡部の研究も含めて、諸見解はつまるところ、総合学科がいかなる趣旨でどのような科目を用意し、生徒にいかに関与をさせるかという点をめぐるものである。

前で見たとおり、生徒は「幅広い」選択肢からの科目選択を高く評価している。しかし、論証で明らかにしたように、科目選択を「興味関心」にもとづいて行った層が一定数を占めること、あるいは時間割のポイントに「何となく作成した点」を挙げる者や、将来的に就きたい職業を「未定」とする者が存在することも受け止める必要がある。これらの層は、総合学科においても自身の進路探求が不十分であると感じたり、幅広い選択肢（機会）で

「進路への自覚」がかえって揺れ動いたり、またはまとまりのある勉強ができなかったなどといった生徒たちであることが考えられる。言い換えれば、進路探求や体系的な学習をすることが未消化、あるいは不満要因となってしまうと思われる層である。これらの層に対し、いかに対処していくのが、総合学科の課題であるといえるだろう。ただし、このような課題層は、他学科においても存在していることが推定され、総合学科のみの課題とは言えず、わが国の高校教育全体の課題と見るべきであろう。

<参考文献>

- ・岡部善平『『総合学科』高校生の科目選択に関する実証的研究—生徒の『時間的展望』の視点から—』カリキュラム研究第6号、1997年a
- ・岡部善平『『総合学科』高校生の科目選択に関する事例研究—選択制カリキュラムへの社会的アプローチ—』教育社会学研究第61号、1997年b
- ・岡部善平『『総合学科』高校生の選択制カリキュラムへの適応行動に関する研究—生徒の『系列コミットメント』を中心に—』筑波大学大学院教育学系論集第23巻1号、1998年
- ・岡部善平『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程—総合学科のエスノグラフィー』風間書房、2005年
- ・教育科学研究所（小島昌夫・鈴木聡編）『高校教育のアイデンティティー—総合制と学校づくりの課題—』『教育 別冊9』国土社、1996年
- ・国民教育文化総合研究所『教育総研年報2004』労働教育センター、2004年
- ・小杉礼子編『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動—』日本労働研究機構、2002年
- ・佐藤良子「高校生の進路選択と今日の高校教育改革—総合学科高校の可能性」北海道大学大学院教育学研究科修士論文、1999年
- ・佐藤良子「高校生の進路選択と総合学科高校の可能性—北海道清水高校教師の学校づくりの実践を通して—」北海道大学生涯学習研究年報、2000年
- ・新海英行・寺田盛紀・的場正美『現代の高校教育改革』大学教育出版、1998年
- ・全国高校生活指導研究協議会『高校生活指導 特集1 検証・総合学科②』第128号、青木書店、1996年
- ・総合学科研究所『「総合学科」の解説と事例』ぎょうせい、1997年
- ・竹内常一・高生研編『揺らぐ＜学校から仕事へ＞—労働市場の変容と10代—』青木書店、2002年
- ・寺田盛紀「高等学校総合学科の教育課程と進路選択教育・職業教育の様態に関する実証的研究」名古屋大学教育学部紀要、第42号第2号、1995年
- ・寺田盛紀「総合学科における職業教育カリキュラムの存在形態」名古屋大学教育学部紀要、第43号第2号、1996年
- ・日高教・高校教育研究大会委員会 太田政男・浦野東洋一『高校教育改革に挑む』ふきのとう書房、2004年
- ・三戸親子「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第69集、2001年
- ・耳塚寛明・樋田大二郎編『多様化と個性化の潮流をさぐる—高校教育改革の比較教育社会学—』（『月刊高校教育 11月増刊号』）学事出版、1996年
- ・安田雪『働きたいのに…高校生就職難の社会構造』勁草書房、2003年
- ・労働政策研究・研修機構『労働政策研究報告書 No.6 移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査（中間報告）—』、2004年

<使用した資料>

- 【森高校】
- ・北海道森高等学校進路指導部『進路の手引・平成16年度』2004年
- ・北海道森高等学校原則履修科目部『本校のガイダンス科目の機能と特色ある教育活動への取り組みについて』2003年
- ・北海道森高等学校「学校案内」2004年
- ・「教育課程表（平成16年度入学生用・学年別）」2004年
- ・「平成16年度ガイダンス科目年間計画」2004年
- 【標茶高校】
- ・北海道標茶高等学校『平成14年度『課題研究』研究集録』
- ・北海道標茶高等学校『平成15年度インターンシップ実施報告書』2003年

総合学科高校における科目選択と進路選択の調査研究

- ・北海道標茶高等学校『自己探求』を学ぶ意味」2004年4月
- ・北海道標茶高等学校『平成16年度学校教育計画』
- ・北海道標茶高等学校「総合学科2004 きっとあえる君のイイ顔！！」
- ・平成13年度北海道高等学校総合学科研究協議会研究発表資料「総合学科開設2年目の取り組み」
- ・『広報しべちや』No.560、2004年10月

【石狩翔陽高校】

- ・石狩翔陽高等学校『夢の実現』～総合学科1期生の軌跡～』『平成16年度 第9回全国高等学校総合学科教育研究大会資料』より
- ・北海道石狩翔陽高等学校『平成16年度インターンシップ報告集』
- ・北海道石狩翔陽高等学校『平成12年度ライフプラン発表会報告書』
- ・北海道石狩翔陽高等学校「学校案内『夢の実現—自分探しの旅』」2004
- ・北海道石狩翔陽高等学校『平成16年度学校要覧・教育計画』
- ・北海道石狩翔陽高等学校、公式ホームページ“<http://www.ishikarishoyo.hokkaido-c.ed.jp/>”

【その他】

- ・「高等学校教育の改革に関する会議第4次報告」1993年2月12日
- ・初等中等教育局長通達文初職第203、1993年
- ・文部省初等中等教育局職業教育課『総合学科関係資料集』1999年3月
- ・総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議報告書『総合学科の今後の在り方について～個性と創造の時代に応える総合学科の充実方策～』2000年1月
- ・文部科学省報道発表一覧（高等教育・2003年）「平成16年度専門高校・総合学科卒業生選抜実施大学」2003年8月15日
- ・『平成16年度 第9回全国高等学校総合学科教育研究大会資料』2004年

[付記] 本論文は、望月美和子が執筆した平成16年度修士論文、「総合学科高校における進路指導と『職業選択』の実態」が基になっている。同論文においては、北海道森高等学校、北海道標茶高等学校、北海道石狩翔陽高等学校（以下、石狩翔陽高校）の3校を生徒調査協力校として設定していたが、石狩翔陽高校の調査回答の回収が遅れたため、同修士論文には同校の調査結果を内容に含めなかった。本論文は、望月のこの修士論文を圧縮したものに、石狩翔陽高校の生徒調査結果を付け加え（主に市原が担当）、考察等に若干の加筆修正を加えた（主に横井が担当）ものである。

<注>

- 1 「高等学校教育の改革に関する会議第4次報告」文部省初等中等教育局職業教育科資料（1993年2月12日）による。
- 2 平成5年文部省令第4号。
- 3 高等学校教育の改革の推進に関する会議、第4次報告「(3) 総合学科を設置する意義」1993年2月12日。
- 4 「新しい学科への7つの疑問にお答えする」『「総合学科」の解説と事例—高等学校教育の新たな展開のために—』ぎょうせい、1997年、pp.206-207。
- 5 総合選択科目群のこと。文部省初等中等教育局長通達文初職第203号（1993年）には、「生徒の多様な興味・関心等に応え幅広い進路選択が可能となるように、学校規模に応じてできる限り多くの分野にわたって複数の総合選択科目群を開設すること」とある。
- 6 岡部（1997b）p.158。
- 7 総合学科としての坂戸高校創設から続いた「4つの『類』にそれぞれ2つずつの『系列』」というスタイルは、2003年度から変更された。「類」は廃止され、現在は4つの「系列」のみが存在する。
- 8 座長に市川昭午氏。委員は池田賢一・佐藤浩章・本田由紀・吉本圭一の各氏。
- 9 「生涯にわたる職業教育（2）各学校段階における職業教育」の「<3>高等学校における職業教育」、p.25。
- 10 その例には、高知県室戸の水産高校の廃校に伴い、普通高校が総合学科転換の対象となったことに反対する地元住民の署名運動の様子が上げられている。このケースは結果として1997年に総合学科となったのだが（高知県立室戸高等学校）、「地元のわたしたちの学校」としての教育要求・運動は「民主的エネルギー」の蓄積という新たな成果を生み出したという。また「県教委から（高校の・引用者）首脳部に打診があり、一般教職員にとっては『寝耳に水』という学校」の例として都立晴海高校が紹介されている。

-
- ¹¹ たとえば、転科以前は学区の「最底辺校」だった和歌山県立高等学校は6名の教員加配となり、HRを20名編成にできたこともあって「学校は活性化し」、「授業がやりやすくなった」り、「生徒にも好評」だという。p.30。
- ¹² 問答は、時事通信『内外教育』第4590号、1995年1月10日から引用した。
- ¹³ 前掲『高校生活指導』第128号、p.17。
- ¹⁴ 当時の坂戸高校では推薦入学者の割合を5割にし、その試験では母体学科の流れを汲んだ4種の実技試験が課せられていたということである。
- ¹⁵ これらは道内の職業科教員3名にインタビューした際に得た、総合学科の専門性に関する意見である。なお、このインタビューは2003年9月に学校外で行った。
- ¹⁶ 1999年3月から5月にかけて、合計約1万人を対象に実施された意識調査。
- ¹⁷ その後、2006年度に9校目の室蘭東翔高校が開校している。なお、清水高校の実践については、佐藤良子「高校生の進路選択と総合学科高校の可能性—北海道清水高校教師の学校づくりの実践を通して—」が詳細な調査を行っている。
- ¹⁸ 名古屋大学大学院教育学研究科教授寺田盛紀教授の調査に同行させていただいた。
- ¹⁹ たとえば「高等学校教育の改革に関する会議第4次報告」1993年2月12日。
- ²⁰ 寺田盛紀氏から教示を得た。
- ²¹ 第9回全国高等学校総合学科教育研究大会（2004年）では、「総合学科高校における『総合的な学習の時間』の指導について」が1つの分科会のテーマとして取り上げられ（第4分科会）、さらに「原則履修科目『産業社会と人間』の指導について」（第1分科会）、「総合学科高校における特徴的な取り組みと諸課題について」（第5分科会）においても“総合的な学習の時間”および「産業社会と人間」の関連についての事例報告がなされていた。
- ²² 「標茶高校から優秀な人材や地域の担い手を育成するため、学校だけでなく町全体で支援しようと組織され、父母会からの会費、各企業からの賛助会費、町の補助金により各種事業が行われている」もの（『広報しべちゃ』No.560、2004年10月、p.4）。
- ²³ 1998年11月「第2回総合学科を考える会」における、町民からの質問に対する道教委教育政策室本間主幹（当時）の回答。北海道標茶高校「総合学科開設2年目の取り組み」『平成13年度北海道高等学校総合学科協議会研究発表資料』、p.5。
- ²⁴ 石狩翔陽高校公式ホームページ <http://www.ishikarishoyo.hokkaido-c.ed.jp/>、2006年学校長挨拶。
- ²⁵ 石狩翔陽高等学校『『夢の実現』～総合学科1期生の軌跡～』『平成16年度 第9回全国高等学校総合学科教育研究大会資料』、2004年。
- ²⁶ 同上。
- ²⁷ 調査票自体は掲載していないが、行論の必要上、質問番号を文中に記載している。必要に応じて質問を略記した。
- ²⁸ 石狩翔陽高校のみが異なるのは、同校からアンケート項目について変更が求められたためである。
- ²⁹ 「総合学科」の認知・理解度合いを問うた質問（5段階評価）で、「よく知っていた」「だいたいのところは知っていた」を回答した割合は「希望者」が56%、「希望者」以外は21%だった。
- ³⁰ 岡部1997a、p.79。
- ³¹ 岡部2005、p.237。
- ³² アンケートでは、それでも教育課程作成上に生じる「しぼり」（時間割上の制約）が生徒にとっての不満要因としてあがっている。
- ³³ 主にトヨタ系列の各社。他に、重・軽工業など製造業が多い。
- ³⁴ 「いい会社」に入れるためには「工業系」の勉強をさせるべきだという保護者の思いが、ことさら強いとのことである（2004年11月16日、鶴城丘高校でのヒアリングより）。
- ³⁵ 国民教育文化総合研究所『教育総研年報2004』p.36。